

〈聴く〉場としてのセルフヘルプ・グループ

—認知症家族会を事例として—

駒澤大学 荒井浩道

1 目的

認知症患者をかかえた家族を支援する社会資源として認知症家族会が注目を集めている。認知症家族会では、定期的に交流会が開催され、介護経験のある家族が集い、日々の介護の悩みなどについての率直な意見交換が行われる。このような当事者同士による支え合い（ピア・サポート）が行われる認知症家族会は、セルフヘルプ・グループと呼ぶことができる。

認知症家族会では、同様の介護経験を共有する家族だけではなく、専門職やボランティアなどの「非当事者」が参加することも多い。また、「当事者」であっても、介護する患者の認知症の種別や程度、患者と家族の続柄などによってその経験は多様である。介護経験は極めて個別的な経験であり、そのバリエーションは介護者の数だけ存在する。このことから、ピア・サポートの効果が発揮される根拠を参加者の「当事者性」にだけ求めることは難しい。

そこで本研究では、ナラティブ・アプローチの枠組みからセルフヘルプ・グループを捉え直し、認知症家族会の交流会の場における参加者の言語的営みを分析することで、ピア・サポートとしての支援効果が生まれる仕組みを明らかにすることを目的とする。

2 方法

本研究では、複数の認知症家族会への継続的な参与観察（15 グループ、35 セッション、2004年～2011年）から得られた逐語録を対象に分析を行った。分析方法は、認知症家族会における「共同体の物語」（Rappaport 1993, 2000）に注目し、それが醸成される「聴き方」について探索的に明らかにした。倫理的配慮は、家族会代表者と交流会参加者に対し研究目的等について文書と口頭で説明を行い、口頭による同意を得たうえで参与観察を実施し逐語録を作成した。また家族会代表者と交流会参加者に対し、逐語録の研究利用について文書と口頭で説明を行い、口頭で承諾を得た。

3 結果

「共同体の物語」を醸成する「聴き方」として、(1)「語りやすくする工夫」としての共感的な反応や発話順序の調整、(2)「物語への介入」としての経験の差異の整理とナラティブ・セラピー的な書き換え、(3)「卒業後への対応」としての肯定的な受容、(4)「ユーモアの活用」があることが明らかとなった。

4 結論

「献身的介護」は、認知症介護の行為規範として強い影響力を持つ支配的な物語である。認知症家族会では、それに対抗する「共同体の物語」としての「手抜き介護」を巧みに醸成することでピア・サポートとしての支援効果を生んでいる。

文献

Rappaport, J., 1993, Narratives Studies, Personal Stories, and Identity Transformation in the Mutual Help Context, *Journal of Applied Behavioral Science*, 29(2), 239-256.

Rappaport, J., 2000, Community Narratives. *American Journal of Community Psychology*, 28(1), 1-24.